

恋の森（緑町広田）

むかし昔、あるところに小さなこんもりとしげった森があった。

お城のあったところから東北に四丁（約四四〇メートル）ほどいったところで、荒神〈こうじん〉さんをおまつりしてある林の中に、五、六才の男の子と女の子が二人相むつまじく何かを話していた。

たまたま通りかかった大人が、「おめえら兄さんと妹の仲かえ。」とたずねてみると、「わしらは、仲のええ、友だちじゃ。」ということである。



昔は、「男女、幼くして席を同じゅうせず」と言われていただけに、他〈た〉の子どもを交えず遊ぶことはきんじられていたためずらしかった。しかし、この二人はいつもいつも、この森にきてはたのしそくに遊ぶようすをみて、双方〈そうほう〉の両親はともよろこび、「おめえら夫婦になったらどうじゃ。」とすすめた。

二人はそれからこの森にきて、たのしげに語りあっていたという。

それ以来、この森を「恋の森」とよぶようになった。

しる人ある、恋の森なる雫〈しずく〉にはよそなる人の袖〈そで〉もぬれたり

とうたわれるようになり、同地に鯉森〈こいもり〉という姓〈せい〉は、ここからつけられたと言われている。

この森の小さな荒神さんは夫婦円満の神さまだと言われ、夫婦仲の悪いときは、この荒神さんの前で相むつまじく話しあえば、もとの恋仲時代の円満な夫婦にもどると言われている。

土地の人はもちろん、遠くこの地をたずねてお参りする姿も見られる。

この藪〈やぶ〉に小さな井戸があり、ここからわき出る水を恋の清水とも呼び、新婚早々、この荒神へお参りすれば、未長く幸せであると言い伝えられている。

緑町広田に伝わる民話の一つとして、古くから知られている。

